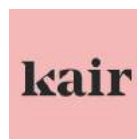


Youkobo & ECoC 2018 交換プログラム, Activity Report

# Youkobo × KAIR 2018



Youkobo Art Space, Tokyo



## 目次

・ Kosice Artist in Residence (KAIR)との交換プログラム 村田弘子 / 遊工房アートスペース

・ 交換プログラム2018 概要

・ 参加作家 活動エッセイ・ポートフォリオ

1) 「仮面女子と都市孤独」 スヴェトラナ・フィアロヴァ

2) 「コシチェでの滞在制作について」 北條知子

-KAIR

-Youkobo Art Space

## Kosice Artist in Residence (KAIR)との交換プログラム

村田弘子 / 遊工房アートスペース

KAIRとの交換プログラムは、2013年に開始した。日本から、2013年：洗川寿華、2014年：金井学、津田道子、2016年：駒井弘枝、そして2018年：北條智子氏を派遣した。一方スロバキアからは、2013年：エリク・シレ、2014年：ボリス・シルカ、2016年：ラデック・ブロウシル、そして2018年：スヴェトラナ・フィアロヴァが遊工房で滞在制作をした。もちろんのこと地理的条件も歴史的背景も大変異なる日本とスロバキアである。スロバキアはチェコ、ポーランド、ウクライナ、ハンガリー、オーストリアに囲まれた内陸の国であり、第一次世界大戦で、チェコ・スロバキアとしてチェコと合併する形で、オーストリア・ハンガリーから独立、さらに1989年に起こったビロード革命を発端として1993年に、スロバキアとしてチェコから独立して、まだ30年に満たない。日本は第2次世界大戦後、70年以上、幸いなことに平和を継続している島国である。そのようなことにはお構いなく、アーティスト達は、違いを享受し、少なからず自身のリサーチや作品制作に生かし活動的に動いていた。

アーティスト達の良き理解者であったプログラム担当者のZuzanaさんが、直に退職されると伺い残念ではあるが、今後のプラハでの活躍をお祈りしたい。また、この場を借りて今までの交換プログラムへのご尽力に、心から感謝したい。

## 交換プログラム2018 概要



### 日本からスロバキアへ

北條知子・サウンドアーティスト

滞在期間：2018年10月1日～11月30日

展示：2018年11月28日～12月4日「Lost and Found」@ Kotolňa

### スロバキアから日本へ

スヴェトラナ・フィアロヴァ・美術家

滞在期間：2018年12月1日～2019年1月31日

展示：2019年1月23～27日：「愛してる」@Youkobo

### 活動成果報告会

2019年1月25日に展覧会会期に合わ、遊工房にて両国参加作家及び多くのアート関係者の参加を得て開催された。尚、会では、並行して行っていたフィンランドとのAIR交換プログラムに参加した両国作家による報告会も実施した。

## 仮面女子と都会孤独

遊工房アートスペースでの滞在中、私は日本社会の構造と特に女性の役割や地位を見いだすことに試みた。この活動は男性優位や性別の固定概念等の根源など、進行中の芸術的研究と平行して行う。私は日本の歴史も学び、江戸-明治期の女芸者の役割、女性描写の春画、型破りで自己主張の強いことで知られるデコラガール(カラフルにデコレーションした装飾を纏ったスタイルの総称)やその他サブカルチャーなどについて調べようとした。しかし、日本のポップカルチャーのある一面が最も目立った。

私は、“アイドル”という現象にすっかり取りつかれたように魅せられた。アイドルは、日本のポップカルチャーのダークサイドを表す。この巨大産業はますます大きくなり、群衆を夢中にさせる。インターネットの膨大な情報をくまなく探し、何時間ものドキュメンタリーを見た後、私は実際に自身で見に行かなければいけなくなってしまった。

最初は、日本の若いアイドルはクールで楽しく、少々奇妙に見える。最初は彼女たちは幾分か現金を儲け、彼女たちの夢を追うために試みているのだろうと気にならなかった。しかし、彼女たちのようなグループを追うファンの多くは中年男性なのだ。アイドルとして、彼女たちは“握手会”で気味の悪い男たちを喜ばせなければならない。ここでの考え方は、女性はフェチの対象とされ、中年男性たちのための商品が市場に出回るのだ。これが成功しているがために、少女たちは男性の期待に沿うようにしなければならないという考えが強化される。

今回の滞在は、西洋のポップカルチャーと視覚言語とは反対に、またそれらと密接な関係にある多様なレイヤーの日本のポップカルチャーやそこでの女性表現について深掘りしていく一助となった。これらの世界をつなぐことは、テクノロジーやインターネットの進歩が人類の深い親交に変わっているという社会的光景の双方の兆しであるという事実である。私は緊張や虐待、相互有益な態度が関係や一体感への憧れに遭遇する明確な境界線の状況についての“短編”を語ろうと試みた。私の作品は地元住民との交流や日常のリアリティの観察によってもたらされた“理解しようとする”過程の反映である。

### スヴェトラナ・フィアロヴァ

実践において、習慣的な境界に同調し、有限性についての考察を論破しようとする一方で、媒体としてのドローイングを絶えずに展開する。彼女はスロバキア及び世界の美術史における形式的特徴を取り入れつつ、現代のヴィジュアルアートの流行を融合させる。普段、自分の人生や物語が主なテーマとして前景になり、他にも（自己の）神話や皮肉、ポップカルチャー、フェミニズム、性別、身体像などもとり扱う。メディアや日常の凡庸さから自発的にインスパイアされたものが、深いかつ無情な自己批判と混ざり合う。そしてそれらの間の境界が曖昧になり、同様の対象の異なる視点に変化していく。多層状の配置と特定のイコノグラフィーや内在するメタファーに溢れるこれらの作品は、しばしば神秘に包まれ、強烈で精神的な姿を見せる。

### スヴェトラナ・フィアロヴァ

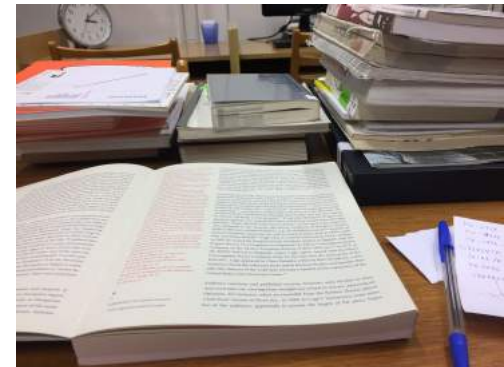


## コシチェでの滞在制作について

北條知子

今回のアート・イン・レジデンスは、自身にとって初めての東欧滞在となった。他のヨーロッパの国々は何回か訪れた経験はあったものの、東ヨーロッパは未踏の地であった。また、自身の専門であるサウンド・アートや実験音楽における情報はほとんどきいたことがなく、まわりに一人の渡航経験者もいなかった。このように、前知識がほとんどないまま、好奇心とインターネットの情報だけを頼りに渡航準備をはじめることになった。

予定していたプロジェクトは、現地のアーカイブ資料を用いたものだった。過去のパフォーマンスやイベントのアーカイブを写真や音声を中心に調査し、記録として残された／残されなかった出来事、瞬間、物の差異を明らかにするとともに、その空白や沈黙からありえたかもしれない事や音を再想像・創造するという趣旨だ。枠組みは決めていたものの、実際にどのような資料が手に入るのか、スロバキア語がわからない中で本当に調査が可能なのか、2ヶ月という短い期間でどこまでできるのか、など懸念を抱いていた。そんな中、幸運にもとても興味深いアーティストを知ることができた。事前のミーティングで現地ディレクターのズザナさんから紹介された、ミラン・アダムチェク (Milan Adamčiak)、1946年生まれのスロバキア人インターメディア・アーティストである。アダムチェクは1960年代中頃から演奏家、作曲家、音楽学者として活動するとともに、自作楽器の制作、具体詩、ビジュアルベースの作品など、特定のメディアにとらわれない作品を晩年まで多数発表した。その多くは反慣習的で、アメリカの実験音楽家のジョン・ケージやフルクサスとも共通する。中でも1970年に上演された作品《ウォーター・ミュージック》は、スイミング・プールの中でパフォーマーと観客が泳ぎながら演奏・鑑賞する、という先進的なものだった。斬新で多彩な作品に興味をそそられ、アダムチェクを対象として調査を開始した。



滞在中は、アダムチェクと親交が深かったアーティスト、研究者のミハエル・ムーリン (Michal Murin) 氏へのインタビューに加え、首都ブラティスラバにあるスロバキア国立ギャラリーのライブラリ、アーカイブでの資料調査や、2017年に同施設でおこなわれた回顧展のキュレーター、ルチア (Lucia Gregorova Stach) 氏からも貴重なお話を伺うことができた。特に印象的だったのは、1970、80年代、共産党が強権的な政策を敷いていた時代に「アマチュア」として活動せざるを得なかったという事実である。大学教員だったアダムチェクは表立った作品発表ができず、休みの日に家にこもって作品を作り続け、たまに仲間内に見せる、といったような生活を続けていた。人に移譲した作品の多くは無価値なものとして捨てられたため、制作した作品の半分は離散もしくは消失している。これらの調査成果を踏まえ、展覧会『Lost and Found』においてアダムチェクのスコアを用いたビジュアル作品2点と、オーディオとビジュアルがセットになった作品1点、滞在期間中に制作したスコアとその演奏音源などを展示した。

コシチェでの2ヶ月間、毎日とても楽しく過ごした。小さいながらも文化施設、ギャラリーがいくつもあり、コーディネーターのイヴァナさんとともに多くのイベントに足を運んだ。また、同居していたウクライナ人のアーティスト、ヴィタリ君とその奥さんのアナさんとは、日々の疑問、アート、将来の夢や政治について話したり、一緒に料理をしたりと有意義なひとときを共有できた。今回は周辺諸国への旅行はできなかったため、いつかまた東欧に戻り、プロジェクトを行いたいと考えている。



#### 北條知子

北條知子は実験音楽とサウンド・アートの領域で活動する学際的なアーティスト／研究者である。2015年、東京藝術大学大学院音楽研究科芸術環境創造領域、ロンドン・カレッジ・オブ・コミュニケーション サウンド・アートコース をともに主席で修了。1950年から1970年に発表された音楽家による音を用いた展示作品に焦点を当てた日本のサウンド・アート前史についての論文が、毛利嘉孝編「アフターミュージッキング」として、東京藝術大学出版会から2017年11月に発売。現在、スイス生まれのアーティスト、ラヘル・クラフトとともに「Reborn Sounds」という進行中の共同プロジェクトをおこなっている。これは地域のコミュニティへのインタビューを通して、個々人の私的で隠された音と場所との関係を明らかにするものである。また、ジョン・ケージが提唱した記譜とシアターの問いをめぐる東京を拠点とするグループ「実験音楽とシアターのためのアンサンブル」の企画者・出演者としても活動している。2017- 2018年のポーラ美術振興財団の在外研修員であり、現在、ロンドン芸術大学 ロンドン・カレッジ・オブ・コミュニケーションにあるサウンド・アート研究所CRISAPの客員研究員としてイギリスに滞在している。

## K.A.I.R. Košice Artist in Residence

国際アーティスト・イン・レジデンス・プログラム”K.A.I.R. Košice Artist in Residenceは、2011年に欧州文化首都のキーププロジェクトの1つとして”Kosice2013”というNGOによって、実施された。欧州文化首都の年を終え、そのNGOは”Creative Industry Košice”へと代わり、国際的な活動や新しいパートナーとのネットワークを展開するための安定した基盤を持つ組織となった。

レジデンスプログラムは、世界中から、そして全ての芸術的分野や表現をするアーティストに向けたものである。我々は彼らのアートプロジェクトの実現や活発な地元のアートシーンとのコラボレーション、彼ら自身を地元や全国に向けて紹介するため、コシチェの素晴らしい文化的でインスピレーションを受ける環境のもと活動する可能性を提供する。

我々は、国際的パートナーと協力して公募に基づいてアーティストを選定する。これまで、我々はポーランドやドイツ、ジョージア、ウクライナ、日本などの異なる国から、アーティストを派遣し、招聘してきた。我々は交換を促し、異なる場面での対話を育むため、同時に3名のアーティストを受け入れられる。コシチェでは、我々は宿泊施設、スタジオ、資金と制作サポートを提供する。



## 遊工房アートスペース

国内外のアーティストが一定期間滞在しながら制作する、アーティスト・イン・レジデンス（AIR）と、在京作家向けスタジオや、作品を展示・発表する非営利ギャラリーを主たる事業とし、同時に、芸術文化を通じた地域活動を推進しています。「ユー（あなた・遊）」の「工房」として、アーティストの自律的な活動の支援を通し、多くの方に芸術文化を身近に体験できる機会と親しんで頂く場を提供しており、これまでに、約50カ国3000人の海外からのアーティストを迎え、250人を超える若手国内作家の展示発表や芸術文化交流の場となっています。（2019年3月現在）

<http://www.youkobo.co.jp>

